

## ディレクター日誌（活動・参加者の様子）

期 日：平成30年8月17日(金)～25日(土) 【8泊9日】  
 場 所：山口県十種ヶ峰青少年自然の家とその周辺山域（山口市阿東）  
 参加者：県内の中学生・高校生（男子8人、女子14人 計22人）

### 1日目 「開会行事・ダッフルシャッフル（荷物の詰め替え）・バックパッキング（荷物を背負っての移動）」

期 日：平成30年8月17日（金） 天気（晴）  
 テーマ：出会いの日（ふれあい体験）

	1班	2班	3班
活動内容	開会行事・ダッフルシャッフル（荷物の詰め替え） バックパッキング（荷物を背負っての移動）		
場 所	山口市立柚木小学校～ 仏峠 泊	山口市立柚木小学校～ バス回転場～ 柚木小学校 泊	山口市立柚木小学校～ 仏峠 泊

#### 【活動の様子】

8月17日、山口市立柚木小学校は快晴。前日の激しい雨は止み、10時30分の開会式に向けて緊張した面持ちで子どもたちが集まってくる。今年は、女子2班、男子1班の3班集体。総勢22名の子どもたちが柚木小学校の体育館に集まった。

一方、スタッフもこの日を待ちわび、少しの緊張を抱えていた。9日間が楽しみなのと、無事乗り切れるかという不安の両方である。9日間を子どもたちが安全に安心して過ごすことができるようにこれまで準備を整えてきた。子どもたちが歩くコースの下見を行い、緊急事態が起きないように様々なシミュレーションを重ねて、もしもの時の対応方法などの研修も行った。準備8割、本番2割である。このことを、心から痛感する9日間となる。同時に、子どもたちの無限の可能性に感動する9日間となるのである。

いよいよプログラムのスタート。開会式では、ディレクターから「『出す』ということ」について話した。自分は仲間のために、自分のために一体何を「出す」ことができるのか。汗か、力か、声か、元気が、やる気か！！ 9日間を、ひと夏の思い出、ではなく自分たちで何かを出し切り、つかみ取る日々にしてほしいと願って、エールを送った。



さて、開会式が終わると、各班で行程に必要な荷物を大きなザックに詰めていくダッフルシャッフルが始まった。スタッフは、山の中で安全に生活をするために何が 필요한のか、

何のための装備なのか、どの順番で詰め込んでいくのか、一つひとつ丁寧に確認をしていく。この過程の中で、子どもたちは、自分の命は自分で守り、仲間の命も自分たちで守る、という意識を育てていくのである。装備は、大きく2つに分けられる。自分の着替えや寝袋などの個人装備と、テントやタープ、料理道具や食材などの共同装備である。共同装備は、班の仲間で分けて持つことになるが、水（500ml×3本）なども加えると、だいたい一人あたり10～20kg近くにもなるのである。14時の出発に向けて、各班パッキングを進めていく。昼食を食べる頃には、緊張の表情は溶け、少しずつ「よし、やるぞ!」「もう、やるしかない!」という顔つきに変わってきた。



ここで、9日間の子どもたちの姿について、先に触れておきたい。スタッフは、前述の通り子どもたちの歩く速さや体力などを考え、コース設定を行い、綿密にシュミレーションを重ねてきた。9日間を終えた子どもたちの姿を見て、ディレクターが感動したことを先にお話する。

女子1班（以下1班）は、予定通りの行程を進んでいくこととなるが、その中で子どもたちは日々「本当の自分」について自問自答する日々を過ごした。結果、9日後の閉会式では、多くの子が「本音」という言葉を使って9日間を振り返っている。

次に、男子1班（以下2班）。この班は、初日から想定されていた行程を外れていくこととなる。つまり、子どもたちにとっては不安だらけの中始まったのではないかと想像する。だが、9日後の子どもたちの表情は明るく「仲間とは・・・」「8人で・・・」という言葉で9日間を振り返る。スタッフは、子どもたちの大きく成長した姿に心を動かされることになる。

最後に、女子2班（以下3班）の歩みは「結果ではなく過程に意味がある。」という言葉が当てはまる。この班は、十種ヶ峰の山頂に立つことができなかった。しかし、だれもそれを悲観的にとらえていない。他の班の歩みをうらやましがったり、自分たちを卑屈に感じたりしていない。自分たちにしかないものを見つけて、「新生3班」と名付けている。それは、この班の9日間の歩きに答えがあると私は思う。

どの班も、実に素晴らしい9日間を過ごした。これだけは間違いのない事実である。

では、話を初日に戻す。いよいよ出発である。

満タンの水を持って本日のテン場（テントを張る場所）仏峠へと旅立っていった。体よりも大きいのではないかとと思われるザックを背負い、紐靴を結ぶ。結構な重労働である。しかも、時刻は真夏の14:00。一番暑い時間帯であり、外は良い天気である。熱中症に注意しながら、6.5km先のテン場を目指しはじめた。

#### 1班 13:50発→17:00着

1班は、お互いを紹介をしながら進んでいく。途中、バスの回転場で水休憩を行い、地

図と地形を見比べながら進んでいった。17:00には、仏峠に到着する。初日は、およそ3時間のバックパッキングであった。順調に見えるが、内面では「もう少しゆっくり歩いて欲しい」逆に「もっと速く歩いて欲しい」「わたしも、話に入りたいんだけど・・・入れない」「こんなに重い荷物を持って、9日間も歩けるかな。不安だな」などのフラストレーションをためていた。その日のミーティングでは、9日間の目標を伝え合うとともに、明日のグループ目標が話し合われた。それは、「一歩踏み出す。一言、話す。」であった。まだまだ、本音を言い合える関係にはいたっていないし、自分の本音がどこにあるのかも自覚できていない頃である。しかし、この班は9日間をかけて「自分の本音と仲間とのぶつかり合い、そしてその先」についてずっと考え続けることになる。

### 2班 14:30発→15:30バス回転場着→17:00着

2班は、出発後途中で引き返し、柚木小学校に泊まることを選択する。これには、子どもたちの心の中は複雑であったと思う。14:30出発の時点では、8人ではなく7人であったのである。もちろん、簡単にその決断をしたのではない。出発前には、皆で声をかけ、説得を試みた。「きっと後から追いついてきてくれる」という思いをもって7人は先に出発することを選択した。しかし、彼は出発できなかった。そこで、子どもたちは大きな選択を迫られることとなった。「このまま仏峠を目指し、明日合流できるのを待つ。」「この場所（途中）で仲間が来るのを待つ。」「みんなで引き返す。」これは、ほぼ半分進んだところ（およそ1時間歩いたところ）で突きつけられた選択である。子どもたちは「戻りたくない」「いや、戻ろう」と話し合いをした。そして結論は、「みんなで引き返す」ことを選択した。引き返してきた7人の姿は、柚木小学校を出発できなかった彼の心の中に何か芽生えてきたと思う。夜のミーティングでも「みんな初めて同士だから気軽に相談してほしい。」「申し込んだからには、頑張ろう。」など子どもたちの言葉で精いっぱい彼に話しかけた。すると、「今日は歩けなかったけれど明日は歩いてもいい。」「戻ってきてくれたみんなのために歩く。」「でも、その先はわからない。」と彼の心が動いたのである。

### 3班 14:10発→18:00着

3班は、途中で体調不良を訴える者がおり、30分近く大休憩をとる。このキャンプの初日からの2、3日は生活の大きな変化や心理的なストレスのため、思うように食べられない、水も飲めない、という状況に陥ることがある。しかし、食べない、飲めないは今後にも大きく影響してくる。なんとか気持ちを持ち直して、荷物を分け合ったり声をかけ合ったりして、18:00頃に仏峠に到着する。この班の明日の目標は「声を出す」である。まず自分にできることを精一杯やろう、という気持ちが表れている。



3班3様の様相を早くも見せ始めているが、各班とも変わらないのは、テン場についての動きである。山の生活は電気がないため、日の入り後の活動が制限される。テン場

についたら、すばやくテントやタープを立てたり、食事の準備をしたりしなくてはならない。長く歩いて疲れているが、ここが頑張りどころである。もちろん、一人ではできないので必然的に仲間とのかかわりが生まれてくる。声をかけ合い、料理を楽しみながら、さらに打ち解けていく様子が見られる活動でもある。

自然の中では、自然に逆らうことなく自然に合わせて生活することが基本となる。インストラクターは、最初のうちは山での生活習慣を身に着けさせるため、必要なことを丁寧に指示する。プログラムが進むにつれて、子どもたちの判断のもと主体的に行動ができるように、理由や価値づけもしっかりと行うことも大切にしている。

このプログラムは4つのフェーズからなり、この最初の約3日間は「トレーニングフェーズ」と呼ばれる。グループとしての機能、責任、協力の在り方、自然の中での生活技術などの習得を目指す。野外での生活に身体的適応させる時期でもあり、インストラクターは参加者に直接的、指示的指導を行う。山での歩き方に加えて、仲間同士のコミュニケーションの取り方など、9日間を安心安全に過ごすために必要なことを、適宜行うのがトレーニングフェーズである。

## 2日目バックパッキング

期 日：平成30年8月18日（土）天気（晴）

テーマ：旅立ちの日（協力の体験）

	1班	2班	3班
活動内容	バックパッキング	バックパッキング	バックパッキング
場 所	仏峠～ 三ツ頭ピークアタック～ 桐ヶ峠～ クオーツバレー 泊	山口市立柚木小学校～ 仏峠～古江堂 泊	仏峠～ 三ツ頭ピークアタック～ 仏峠 泊

### 【活動の様子】

2日目の朝を迎える。慣れない山の中の生活と、思いのほか下がった気温になかなか寝付けなかったようであるが、予定通り5時に起床し、薄暗い中で行動を開始した。天気予報は晴れ。初日の山歩きには絶好の天気となった。この日は、仏峠の三ツ頭登山口から、三ツ頭の山頂（989.4m）を目指し、宿泊地のクオーツバレーを目指す予定である。



出発前には、互いのザックの重さを確かめ合うことで自分のだけでなく、仲間のチャレンジを感じることができる。このとき、子どもたちは「平等」について考えることとなる。荷物は、物理的に等分すればよいのだろうか、その日の体調、コース、役割、体格、運動経験など多くの条件を考え、どのように荷物を分配することがよいのか、考えるのである。

同時に、仲間がたくさんの荷物を持っていることに心を痛めたり、自分が荷物を持っていないことにつらさを感じたりする子もいる。ミーティングでも話題になりやすい題材である。日常で背負うことのない重さのザックを背負い、いきなりの急登が始まる。歩き始めに大切なのは、とにかくゆっくり歩くことである。普段の歩きよりもゆっくり進むことを意識し、呼吸が上がりすぎないようにする、そうすることで山道が体になじんできて、疲れにくく同じペースで歩き続けることができるようになる。また、時間を決めて意識的に休憩をとり、随時水分や糖分を補給することも重要である。休みすぎるとしんどくなる、食べないと歩けない、これらのことはインストラクターの声かけとともに、子どもたちが徐々に体感していく。山歩きの基本を、インストラクターから教わりながら互いに声をかけ合いながら山頂を目指す。また、地図とコンパス（方位磁針）の使い方も教わりながら、歩いている道の向き、斜度（等高線の詰まり方）、周りの地形などから、現在位置と進行方向を知るためのトレーニングも重ねていく。



天候に恵まれたこともあり、三ツ頭山頂では、十種ヶ峰を正面に臨むことができた。1週間後のゴールとなる山を見据えられたことで、これからのチャレンジへの意識を高めることができたようである。

1班：5：00起床→7：00発→9：55三ツ頭山頂→13：00桐ヶ峠→15：30クオーツバレー着

起床から、朝の準備が早く、前日のミーティングで確認していた通りに行動することができた。歩き始めてからも、30分ごとに小休憩をとるなど、山歩きのトレーニングもしっかりと行われた。それも、体調に大きな問題を抱えているメンバーがいなかったことが大きな要因であろう。歩きながら、班のかけ声も決まりはじめ、みなが大きな声で互いの名前を呼びあう「わっしょいコール」が完成しつつあった。しかし、下りに入ったころ、声が出なくなり、足も進まなくなり、つらい気持ちを感じている子どもたちも出始めた。ミーティングでも、「しっかり声を出そう！」ということが話題に出て、多くの共感を得ていた。明日は3日目、体力的にも一番しんどい時に差し掛かる。この班の歩きに注目したい。1班は、初めてのティップを経験する。ティップは、お風呂のないこのキャンプにおいて大きな意味をもち、最高の時間である。汗を流すことで、心が晴れ晴れとすることに加え、ダニの吸着を防ぎ、あせもの予防に役立つ。この時期の高い気温で上がった体温を下げ、熱中症の予防にもつながる大切なプログラムである。この日は、8時間近い長旅を終えた満足感と、ティップの心地よさを十分に感じて、20時にはテントの中に入っていた。山での生活が早くも身に付き始めていることがうかがえる。

2班：6：00起床→8：40発→10：10バス回転場→12：00仏峠→15：30古江堂着

昨晚のミーティングでしっかりと話し合いをした2班は、予定通りの6：00起床とな

った。出発予定時刻であった8：00に間に合わなかったのは、失くし物があったためである。その日の朝まであったはずの、笛（一人に1つずつ）がなくなったのである。これは緊急の状況になったとき、自分の状態や場所を周囲に伝えるための笛であり、命を守るために必要不可欠なものである。さきほどまであったはずの笛がない。子どもたちは、片づけたテントの中、自分のザックの中を探すが、見つからない。「さっきまであったのだから、きっと誰かの荷物の中に入っているだろう。」との判断のもと、見つからないまま出発することにする。しかし、この判断は後々まで大きな影を落とすこととなるのである。1時間30分をかけて、昨日引き返したバス回転場に到着する。今日は8人そろっての到着である。12：00には仏峠に到着して、昼食をとる。

気持ちを入れ替えるためにも、仏峠の水場でディップを行う。子どもたちは、4時間近く上り道を歩き続けて、疲れた足を水に浸したことで、気持ちをリフレッシュすることができたようである。途中「歩けない」と訴えた仲間の荷物を分けて持つなど、仲間のためにできることについて常に考えて



いるグループである。テノ場の古江堂には、明るいうちに到着したことで、穏やかな時間を過ごすことができた。だが、「今日は歩いた。帰ります。」と彼が訴えるのである。それについて、この日のミーティングでも話し合いが行われ、「じゃあ、明日歩いたら帰る。」となる。7人が彼の気持ちと正面から向き合った結果、少しずつだが、確実に彼の心にしみこんでいく何かがあったのではないだろうか。この班は、その日その日を一生懸命であること、頑張り続けること、あきらめないことの素晴らしさを教えてくれる。

3班：5：00起床→7：00発→11：20三ツ頭山頂→12：20体調不良発生→大  
休止→15：45仏峠へ向けて出発（引き返す）→17：45仏峠着

予定通り5：00起床、7：00には仏峠を出発する。子どもたちの表情もよく、いきなりの急登を楽しんでいたようにも見える。順調に三ツ頭山頂に着くものの、予定より1時間以上遅れている。本部は「何かあったか」と心配しつつも、班からの連絡を待っていた。12：20ごろ、本部へ無線が入り、昨日と同じ子どもが体調不良を訴えていると連絡がある。現在地を確認し、すぐに稜線上で待機していた本部スタッフを向かわせる。3班の現在地、現在時刻、何よりも子どもの状態から判断し、引き返すことを提案する。この提案は、子どもたちに受け入れられなかった。しかし、15：00の段階で、三ツ頭山頂あたりでは、桐ヶ峠からの下りは夜行となってしまう。それは、子どもたちの安全を考えたときに、リスクが大きすぎる。インストラクターの丁寧な説明を受け、子どもたちは納得して仏峠へと戻ることを決意した。体調不良を訴えた子を先頭にし、少しずつ引き返し、17：45、仏峠へ到着した。このことは、3班が「ゴールではなくて過程が大事」と考え始める一つの出来事となる。あの場所にとどまっていた3時間余り、子どもたちは仲間を励ますためにも歌を歌ったり、絶えず話しかけたりして雰囲気をも暗くならないようにしていたと聞いた。ミーティングでも、次の日に向けて気持ちをしっかりと切り替え

ていた。この班の芯の強さが垣間見えるエピソードである。昨日とは気分を変えて、少し場所をずらしてテントを張り、今日の行程を振り返る。しっかり声をかけ合うこと、しっかり飲んだり食べたりすること、を確認するミーティングとなった。

### 3日目 バックパッキング

期 日：平成30年8月19日（日）天気（晴）

テーマ：発見の日（探求の意欲）

	1班	2班	3班
活動内容	バックパッキング	バックパッキング	バックパッキング
場 所	クオーツバレー ～ 白井トンネル越え ～ 上宇津根 泊	古江堂～桐が峠～クオー ツバレー 泊	仏峠～ 古江堂～桐が峠～クオー ツバレー 泊

#### 【活動の様子】

3日目の朝を迎えた。疲労がたまり朝の行動がづらくなってくるころである。天気予報は晴れ。天気は、どこまでも子どもたちの活動を後押ししてくれている。

1班：5：00起床→8：00発→9：15第一水ポイント→10：45白井トンネル下  
→15：50テニ場着

1班の今日の目標は「心を開く」だ。この8人が大きく変化し始めるきっかけとなる一日が始まった。インストラクターは、順調にいつているように見える時ほど、子どもたちを見ている。順調に見えるときには、必ず誰かが必要以上に「我慢」していることが多い。このキャンプの行程は、大人でも音をあげたくなるほどのものがある。インストラクターは、一人ひとりに声をかける。その中で、子どもたち一人ひとりの思いや悩みを聞き取っている。インストラクターとの信頼関係ができ始めると、自分のことを仲間にも話すようになってくる。そう、本音の解禁である。今日のめあてである「心開く」ともつながっている。この日の日記に「昨日の下りの気まずさに比べたら、今日の急登なんてへっちゃらだった」とある。えらかったら「えらい」と言う、待ってほしかったら「待って」と伝える。当たり前のように、これが難しい。頑張り屋さんが集まった班は、どうしても自己犠牲をしてしまうところがある。ネガティブなことは言ったらダメなんだ、「いやだ」とか言ったらみんながいやな気持ちになっちゃう、と考えてしまう。中学生、高校生の女の子は、そう考えがちであり、ネガティブなことは言わないようにと日々の生活の中で学んできている。「がんばらなくてもいいんだよ。」この言葉が心に響いたとミーティングで話した子がいた。確かにこのキャンプは、我慢することも頑張ることも多いキャンプである。でも、みんな我慢してる、みんな頑張ってる、これに勝るエールはないのではないだろうか。

「えらいはえらい」「嫌だは嫌だ」でいいのである。その気持ちに正直に向き合ったところから、自分はどうすればいいのかを考えればいいのである。母親に会いたくて泣いた子どもいる。家族に会いたいのは当たり前の感情で、それを我慢することはない、それに気付けたとき、この班の子どもたちは本音を話してもいいんだ、話すと楽になるんだ、という心の開放を味わい始めたのではないだろうか。大きく班が変容するきっかけとなる一日であった。中学生は泣かない、高校生はもっと泣いちゃいけない、そんな粋が外れ始めた瞬間かもしれない。

2班：5：00起床→9：30発→12：00桐ヶ峠→13：50高岳登山口（0合目）

15：30テン場着

予定通り起床し、テント、タープを片づけた2班。出発予定時刻は7：00である。しかし、実際に出発できたのは9：30。何があったのか。昨日からのなくしもの（笛）が見つからないのである。本部スタッフも合わせて大人4人、子どもたちも2人組を作り、徹底的にザックの中、テントの中をひっくり返して探すが、見つからない。徐々に日は高くなり、暑さとの戦いも始まる。しかし見つからない。笛は、命にかかわる装備である。これなしに、本格的な山歩きに出発できない。精いっぱい探すものの見つからない。「きっと、誰かの荷物に入っているはず」と信じた8人はここで自分たちの考えの甘さが生んだ結果に苦しむことになった。出発が遅れば、当然、行程も遅れる。焦りが生まれれば、心に余裕がなくなる。つらい状況だ。8人で話し合った結果、前に進むため、彼らは笛をなくした仲間を囲むようにして歩くことを決めた。笛をなくした子は、さらにつらい状況になる。しかし、失くした物のことや、「帰る」を主張する仲間を説得すること、一つひとつの出来事を他人ごとではなく、自分事として考えた。自分にできることを考えた。これがこの班の長所として、日に日に磨かれていった。初日から、「帰る」ことを訴え続けている彼は「頑張れるところまでがんばって、限界になったら帰ることになった」と言い方が変わってきた。相変わらず「帰る」という意味は固いが、「限界まで」という言葉がつけ加わってきた。子どもたちのたゆみない働きかけのなせる業である。この日は、ディップを行い、気持ちをリフレッシュさせている。明日に向けて、心機一転頑張ろうという気持ちが膨らんでおり、これからの歩きが楽しみである。



3班：5：00起床→8：15発→10：00古江堂→13：40桐ヶ峠→15：30高岳登山口（0合目）17：00クオーツバレー着

みんなが元気にテン場につけるようにしたい。そのためには自分には何ができるのか、精いっぱい考えて歩いた一日であった。つらい行程で、泣いてしまった仲間がいる、足が止まってしまった仲間がいる、それをそのままにしておかないのがこの班のいいところである。荷物を持ってあげよう、声をかけよう、率先して前を歩こう等、自分たちができる



ことを考え実践していた。自分自身も限界にある中で、今ちょっと頑張れる自分が頑張る、これが8人で歩くためのやり方だった。下りが苦手で、恐る恐る下ることになった3班は、とても時間がかかった。でもそれは、ケガなく安全に、自分たちのペースで歩くことの大切さを知るきっかけにもなった。

## 4日目 ソロ・バックパッキング

期 日：平成30年8月20日（月）天気（晴）

テーマ：挑戦の日（困難の克服）

	1班	2班	3班
活動内容	バックパッキング ソロ入り	バックパッキング	バックパッキング
場 所	上宇津根 ～ 福谷 ～ソロ入り（泊）	クオーツバレー ～ 白井トンネル越え ～ 上宇津根 泊	クオーツバレー ～ 白井トンネル越え ～ 上宇津根 泊

### 【活動の様子】

4日目は、3日間のトレーニング期間から子どもたちが主体的に動いていく期間に少しずつ移行していく。「エクスペディションフェーズ」と呼ばれ、今までにないさまざまな体験をとおして、グループ内に強い信頼関係が生まれ始める一方で、グループ内で衝突が発生しやすい時期でもある。インストラクターは、行動の決定の多くを参加者に任せ始め、非指示的なさりげない支援を行う。子どもたちは、行程の進め方やテントなどの設営・撤収なども徐々に自分たちの判断で行っていくようになる。また、ファイナルツアーに向けて、グループを作っていく期間でもある。

### 1班 5：00起床→8：00出発→10：00福谷着→13：00ソロ入り

本日は、上宇津根から、山裾の道を福谷を目指すルートである。高低差はほとんどなく、2時間あまりで歩ききることができる。途中地域の方から「がんばって」と声をかけられ励まされている。地域の方は温かく、子どもたちのチャレンジをさまざまな形で応援してくださっている。子どもたちも素直にその温かさを受け取り、自分の力に変えている。素直に周囲の人々に感謝でき、相手の思いを受け取ることができる素直さを取り戻すことができるのも、このキャンプの素敵なおところだと思う。4日目ともなると疲労はピークに達しているが、気持ちのモチようで楽しく歩けるところもこのプログラムも奥深いところである。テン場についたら、ディップで身を清め、ソロの準備を始める。子どもたちは、ずっと一緒にすごしてきた仲間たちと離れ、一人になるのは不安も大きかったようである。

2班 5：30起床→8：50発→11：30白井トンネル下→12：30白井トンネル  
稜線→16：50上宇津根着

前日に、足場の悪い道を下ったことで肉体的にも疲れがピークに達している子が多い。さらに4日目は、精神的にもずいぶん追い詰められるときである。その中で、「皆が助け合い、声をかけ合うのを見て、自分もがんばろうと思った。」と人の頑張りから勇気をもらったと述べる姿があった。また「持っている食材と調味料で色々作って、工夫することが楽しい」と、限られた中で喜びを見出しているたくましい姿もあった。初日に歩き始めることができなかった子どもも「今日はつらかった。限界を感じたので帰ることにする。でも、もうちょっとがんばる。」と言っている。この、彼のがんばりは、仲間に大きな勇気を与えていたのも事実であろう。「全員が欠けることなくゴールする」この班の共通目標が定着し始めた時期である。「今、ここに8人でたっていることを奇跡ではなく、8人の力が集結したからである」と考えているところにこの班のすばらしさがある。

3班 5：00起床→7：50発→11：30白井トンネル下→16：50上宇津根着

この日は、起床から調子を崩している子どもが2人いた。今日の行程は、道路を2時間歩き、その後は地図読みのトレーニングの中で道なき道を歩く日である。班全員が不安を感じながら出発した。道路を抜けたあたりに一人の子どもの足が完全に止まってしまう。本部判断でその子どもを自然の家で休ませることとした。ここで1つ大きな出来事がおこる。抜けた子どものザックはそのままそこにある。だれが持つのか。みな、手が拳がらない。もう一人分の荷物は大きな負担である。でも、「だれか持って」とも言えないのである。インストラクターから「誰のザックが軽いの？」と問いかけがある。一人の子どもの名前が拳がる。



それは、2日目に調子を崩していた子である。みんな、「調子が悪いのだから、重たいものは持たせられない」と配慮していたのである。ここでさらにインストラクターが突っ込む。「本当にそれでいいの？持てるか持てないか聞いたの？」子どもたちは一様に首を振った。本人も「持てる」と言う。周りの配慮と、本人の意思が共通理解できていなかったのである。人のため、仲間のため、と自分が黙ってがんばることは、必ずしも正しいわけではない。自分の状況を相手に理解してもらうこと、その理解の中でみんなが互いのがんばりを知っていること、これもこのキャンプで大切になる。このインストラクターの言葉は、子どもたちに「いいことばかりを言うんじゃない。悪いことも言い合える仲間になろう。」と思わせるきっかけとなった。

## 5日目 ソロ・バックパッキング

期 日：平成30年8月21日（火） 天気（曇）

テーマ：思索の日（克己と反省）

	1班	2班	3班
活動内容	ソロ明け バックパッキング ロッククライミング	バックパッキング～ソロ入り	
場 所	福谷～ロック下（泊）	上宇津根 ～ 福谷 ～ ソロ入り（泊）	

### 【活動の様子】

ソロとは、これまでの「動」に対して「静」のプログラムである。子どもたちにとって、疲れた体と心を休める時間であるとともに、「自分」や「他人」、「それまでの出来事」を見つめ、自分を振り返る貴重な時間である。子どもたちはここで、保護者の方からの手紙を読んだりその手紙に返事を書いたり、これまでの自分を振り返って日記を書いたり各自が思い思いの時間を過ごすこととなる。ソロに入ると、ソロが終わるまで一人で黙って過ごさなくてはならない。24時間近い時間を、一人で過ごすのだが、子どもたちが動くことができる範囲は、自分で設置したソロトップの下（小さめのタープ、半径2mあまり）のみである。そして、日が暮れて、夜がやってくる。五感が研ぎ澄まされ、自然の音が聞こえてくる。虫の鳴き声、風が木々を揺らす音、川の水が流れる音、木々の合間から見える星。その中で、子どもたちは何を感じるのだろうか。

1班 9：00ソロ明け→11：00発→12：30テン場着→13：30～15：30  
ロッククライミング

1班は、前日11：00からソロに入り、ソロ明けが翌日の9：00。22時間、一人で過ごしたのだが、ソロが明けると、子どもたちは堰を切ったように話し始める。一人で過ごすことが不安だったことを訴える子も多い。家族からの手紙を読むことで、家族の存在の大きさ、家族に会いたい気持ちが膨らむ。自分の小ささを感じる子もいる。「みんなはすごい。自分は……。ものすごく泣きたい。でも、みんなは泣いてない。こっそり泣いておこう」と思っていた子がいた。

ソロ明けから2時間あまりでパッキングを済ませ、子どもたちはロッククライミングに向かって出発していった。本来は明日の活動内容であったが、台風接近のため、荒天が予想される。スタッフが十分に対応できることが確認され、本日のロッククライミング決行となった。

ロッククライミングでは、「互いを信じあう」ということをザイル（ロープ）を通して直に感じるができる。岩下にいる子どもたちは、岩を登る仲間のチャレンジを全力で応援する。チャレンジャーとザイルでつながれているピレイヤーはザイルを通じて、チャレ

ンジャーの息遣いを感じることはできる。しかし実際に手を伸ばして直接応援することはできない。チャレンジャーが一人で挑戦する時間である。でも、チャレンジャーは孤独なのかといえそうではない。チャレンジャーは仲間の声と、ザイルから伝わってくるビレイヤーの力強さを感じる事ができる。ロッククライミングは、決して一人では成し遂げられないことも仲間がいればできる、と体験を通して思えるプログラムである。

岩に上り切ったときの子どもの達成感に満ちた表情は実に美しかった。チャレンジしている仲間の力に何とかなりたいと一生懸命に声をかける子どもたち、下から見える突起を伝える子どもたち、終わるころには声が枯れていた。「一人はみんなのために。みんなも一人のために」すばらしい時間であった。



この日のミーティングで1人の子が自分の弱さについて告白する。それを受けて、「みんな強い人だと思ってた。

でも、みんな弱いところがあって、泣くこともあるんだと知った。本当のことを話してくれてうれしかった。この仲間だから話したって言ってくれて、もっとうれしかった。」という感想を持った子がいる。これは、ソロの時に「みんなは泣いてない、自分だけ。だからこっそり泣こう。」と言っていた子である。また一つ、1班のテーマ「本音で話すこと。そしてそれが気持ちいいこと。」に近づいた。自分だけじゃない、と知ったとき、自分の弱さをさらけ出すことができたとき、人はまた、一段と強くなっていくのではないだろうか。

明日からは、2泊3日のツアーファイナルが始まる。この子たちの歩きに期待したい。

2班：5：00起床→8：15発→10：40着→14：30ソロ入り

「ソロに入って寂しかったし、帰りたかった。でも、ソロに入る前と違い、自分の本当の気持ちが何となく分かりました。一人でやるのは大変だけど、これをみんなやっているのだな、と思いました。」自分の本当の気持ち、深い言葉である。スタッフに「いい家族だね。」と声をかけられ、心動かされた子もいる。初日からのグループの状況を振り返り、仲間の素晴らしさを感じた子もいる。やっぱり、8人がいい、8人でゴールしたいと心から思う時間であったに違いない。子どもたちの成長は、計り知れない。ある子どもの日記に

「彼は大きく成長した。初めは、歩かないと言っていたのに、なんだかんだと今日この日まで歩いている。そして、今日は、仲間のことも考えていた。」とある。素直に仲間の成長を喜べるのは、「歩かない」と言っていた彼のことをありのままに受け入れていたからだろう。責めるでもなく、置いていくでもなく、徹底的に向き合ってきた結果なのであろう。8泊9日という長いキャンプだからこそ、じっくりと向き合う時間を作ることができる。しっかりと「待つ」こともできる。



もう一つ「8人」の素敵なエピソードがある。実は、ソロに入る前に一騒動起きている。

それは、「笛」のことである。まだ、笛は見つかっていなかった。今までのように、誰かが挟んでいればいい、ということではできない。ソロは一人ずつの活動であるからだ。しかも、夜を超す活動である。では、どうするのか。彼らは、8人そろって本部へとやってきた。状況の説明をしたのは、笛を無くした本人ではなかった。仲間が仲間をかばいながら、今までの事情を自分たちの責任として説明した。この班の8人は、どこまでも8人であろうとしていた。どんなファイナルを見せてくれるのか、とても楽しみになった。

3班：5：00起床→7：35発→10：30着→12：20ソロ入り

今日は、体調不良で休んでいた子も朝から合流し、一緒に歩き始めた。みんなが本当にうれしそうだった。6人の夜は思った以上に不安で寂しかったらしい。

2時間以上を歩き、ソロサイトに到着した。ディップですっきりして12：20にソロに入る。ソロ中に体調不良になった子がいる。この子は、前日の夕食時にアルファ米（1食分）を多いから食べられない、と言っていた子である。やはり、あの時から体調を崩していたのであろう。食べられない、飲めない、寝ていないは、このキャンプでは体調不良のもととなる。聞けば、キャンプ前から調子は悪かったようである。それでも、仲間のために、自分の目標達成のためにこの子は頑張ってきたのである。だれよりも声をかけ、率先して「荷物を持とうか？」と気を配っていたことは、ほかの仲間からも聞いている。「一人で頑張りすぎることは、グループの成長にならないこともある」ということを皆が学ぶ大切な出来事だったといえる。この子は、「帰らない」という選択をする。すこし、建物内で休んで合流したい、という強い意志を持って一度離脱する。

## 6日目バックパッキング「グループツアー」

期 日：平成30年8月22日（水） 天気（曇）

テーマ：冒険の日（責任と信頼）

	1班	2班	3班
活動内容	バックパッキング（グループツアー）	バックパッキング（グループツアー）	
場 所	ロック下～ 鍛冶ヶ原 泊	福谷～鍛冶ヶ原（泊）	

### 【活動の様子】

6日目は、ファイナルツアーを意識しての活動となる。ファイナルエクスペディション・フェーズと呼ばれ、インストラクターの手を借りずに、グループだけで目的地を目指す。生活や活動のすべてを自分たちで話し合い、決定し、行動していくことになる。グループで困難を克服するため、それだけ大きな成功体験を味わうことができる。そして、仲間に対する信頼もゆるぎないものになる。インストラクターは、安全に関する必要最低限のこ

とだけ直接的な指示を行い、徐々に活動を子どもたちに任せていく。目を離さず、近すぎず離れすぎず、子どもたちの安全が把握できる適当な距離を保って、見守っていく。子どもたちはこれまでインストラクターから教わってきたことをもとに、自分たちで協力し合っ

#### 1班 5:30起床→7:30発→10:45着

今日のグループの目標は、「自分たちで行動する」である。前日にロッククライミングを済ませていたため、本日は移動の一日となった。ただ歩けばよいわけではないがこのキャンプである。たしかに、ただひたすら前に足を出せば必ずゴールにはたどり着く。しかし、いかに歩いたか、どのような気持ちだったのかが重要なのである。この日の前半は、声も出さず、道を見失ってしまい気持ちが暗くなってしまったようである。そこで、ミーティングを行い、「自分たちで行動する」ことについて考えた。大人を頼らない。自分たちでできることを考える。すると、後半の歩きについて「しっかり声を出せた。」「後ろの人を振り返って声をかけられた。」と自分を褒めている子がいた。この子は、今までできなかったことを形にできたこと、そのように行動しても受け入れられることを体感できた1日となったようである。この子は日記の結びに「明日は自分が遅れてしまうかもしれない。」と書いている。これは、「遅れてみんなに迷惑をかけたくない」ではなくて、「大丈夫。きっとみんなが助けてくれる。」という気持ちが込められているように感じた。1班の子たちの振り返りには、常に仲間の名前が出てくる。それも、日々違う名前が出てくる。なんて素敵な7人なんだろう、と改めて思う。その姿をインストラクターは見守っている。ここぞという場面でしっかりと関わり子どもたちの内面を引き出していく。このことがこの班の9日間のテーマ「本音で話す。それは気持ちいい」につながっていったのであろう。のちに聞いた話では、毎日ミーティングで誰かが泣いていたという。サブインストラクターは、涙なしに子どもたちの話は聞けなかった、と9日間を振り返っている。

#### 2班 7:00ソロ明け→10:00発→13:10R315着→15:15林道入り口通過→17:00着

この日、この班は大きな転機を迎える。徐々に変化しつつあった彼の言動だが、決定的な出来事が起こる。それは、ソロ明けを終えてバックパッキングを初めた10分後。仲間の一人が倒れたことに始まる。小雨のため、カッパを身に着けたこと、立ち上る湿気のため、体温調節がうまくできず体調不良を訴えたのである。

そのときに彼は「おれもがんばるから、一緒に十種ヶ峰の山頂に立とう。」と言ったのである。具体的な未来の目標を語る言葉に、一同がざわついた。出発してわずか10分で体調不良の状態になったことで、グループの雰囲気はどんよりとしたものだったが、彼の言葉はさわやかに駆け抜けた。班の士気は一気に上がる。気持ち次第で、荷物も軽くなり、遠く思えるゴールも楽し



く歩ける、このキャンプの醍醐味でもある。前日まで彼の目標は「帰る」だった。でもこの日から目標は「がんばる」に変わった。6日間の間に8人が、大きく、大きく成長したのである。

雨も上がり、あと数キロで本日のテン場へとたどり着こうとするころの子どもたちの会話である。「ここ休みやすいところだけど、まだ30分経ってないよ。どうする？もう少し行く？ここで休む？」「う～ん。ぼくはもう少し進んでからにしたいな。」「そうだね。そうしよう。」発言した子は2、3人であったけれど、みんなが納得して前へと進み始めた。休憩したからしようでもなく、進みたいから進もうでもなく、みんなが納得できるようにリーダーは提案をした。そして、自分はどう思うかを伝え、みんながそれに納得する。ファイナルツアーにふさわしい姿を垣間見ることができ、私は大きく心を打たれた。この子たちの、明日のピークアタックも、きっと仲間を思いながら、一步一步を歩いていくのだろう。とても楽しみである。



3班 7:00ソロ明け→9:25発→11:50R315着→15:15林道入り口通過→17:00着

7:00にソロを開けフルーツパーティーを行った。日ごろ、食が細い、と言われていた3班だが、予想を覆してフルーツ完食、この日の朝ごはんだったハンバーガーも完食している。そして、たくさんしゃべった。1日近く一人でいた間に考えたこと、寂しかったこと、たくさんのことを伝えたい気持ちが爆発していた。

バックパッキングも手際よく済ませ、本日のテン場、鍛冶ヶ原へ向けて出発した。このとき、6人での出発である。ソロ中に体調を崩していた彼女は、この時点で合流ができなかったからだ。子どもたちは仲間を心配しつつも、7人分の荷物を持って出発する。すると、小雨が降り打出した。初めてカッパを着て歩いた子どもたちは、次々に蒸し暑さに体力を奪われていく。まだ、比較的元気が残っているメンバーが、その子たちの荷物も手分けしながら、一つ山越えをした。そのころには、天気も回復し、気分も持ち直していた6人だったが、再び足が止まる。2日目から「足が痛い」と言っていた仲間がいる。その子の足がとうとう限界を迎えたのである。まずは1時間越えの昼休憩の中で応急手当てを行う。涙が止まらない。皮が大きくはがれ、小指の肉がむき出しになっている。見れば、親指の爪も、肉に食い込んでいる。「ちゃんと、爪を切ってきてね。」と事前説明会で言われたことを守ったのだが……。それでも、この子も「帰る」は一言も言わなかった。歩き出す、そして立ち止まる、を繰り返して2時間後。「崩れるように倒れこんだ」と緊急の連絡が入る。すぐに病院へ。39度の熱が出ていた。体調不良からくる発熱と思われた。それでもこの子は、あきらめていなかった。自分から「帰る。やめたい」は言わなかった。本部判断により、「リタイヤにしよう。」と伝えたとき、彼女は大きくため息を吐いた。もう一人、自然の家で寝ていた子にも「ほぼ1日近く寝ているが、班に戻れる元気はまだか

なあ・・・。一旦下山して家に帰ろう。」と伝えたとき、彼女は激しく泣いた。本当によく頑張っていたんだと心を打たれた。2人のことは、言葉にしなくても残りの5人には伝わっていたようである。この日の日記には「彼女はよく頑張っていた。強引にでも止めなくちゃいけなかったのに。」と反省している子がいた。だからこそ、「2人の分まで、頑張る。2人の荷物も、持つ。笑顔で2人に再会したい。」この日の夜、5人は、明日への思いを大きく膨らませて眠りについた。一旦下山して家に帰った二人も、日記を書き続けていた。「登ってほしい」その気持ちに溢れ、自分は体調を戻す、そう決意が書かれていた。離れていても、心は一つ。気持ちはいつも、5人と一緒にあったのだろう。

## 7日目 ファイナルツアー「十種ヶ峰ピークアタック」

期 日：平成30年8月23日（木） 天気（曇のち晴れのち台風接近）

テーマ：覚醒の日（実行力と協調性）

	1班	2班	3班
活動内容	ファイナルツアー（十種ヶ峰ピークアタック）		
場 所	鍛冶ヶ原～深谷山稜線～十種ヶ峰山頂～ 十種ヶ峰青少年自然の家体育館（台風接近のため緊急避難） 泊		

### 【活動の様子】

今日は、いよいよファイナルツアーである。グループの様子は、それぞれ特徴があり、目標もそれぞれ違っている。しかし、三ツ頭に登ったときから、はるか遠くに見えた十種ヶ峰は子どもたちにとって最大の目標であった。長い道のりを経て、ついにピークアタックの日。台風接近に伴い、本日のテン場は十種ヶ峰青少年自然の家体育館となった。17：00までには到着できるように、と各班に伝えてある。ファイナルツアーは、時間との戦いにもなった。台風接近の予報から考えても、十種ヶ峰山頂に到着する時刻は、360°のパノラマが子どもたちを待っているはずである。これまでの集大成ともいえるグループチャレンジがスタートした。

1班：5：00起床→7：15出発→ 山頂→ 下山開始→15：30着

「ともに～自己探求の旅～」本日の目標である。出発までの朝の行動は、ばっちり身についている。てきぱきと朝食をすませ、パッキングを済ませ、ほぼ予定通りに出発をした。始めの急登も声をかけあいながら登り切り、稜線を進んでいく。子どもは「きつかったけど、声をかけあったから、雰囲気が悪くならなかった。」と振り返っている。今までの歩きで学んできたことが、生かされていることがわかる。とにかく声をかけあい、励ましあい、ピークを目指した。ピークでは、360°の雄大なパノラマが待っていた。7人は、班の恒例となった「わっしょいコール」を叫び、じっくりと山頂を満喫した。どの子どもも、よく声が出る。このメンバーだからこそ出せる自分がそこにあるのだろう。



下山途中、疲れとあと少しという安心感からか、メンバーが2つに分かれて歩く場面があった。すかさず声をかけ合い、ともにあることを意識する子どもたち。ただ歩くのではない、いかに歩くのか。ともにあるとはどういうことなのか、最後まで考え抜いて体育館に到着した。ゴールは、7人で手をつないでいた。最高の笑顔だった。

2班：5：00起床→6：45出発→13：00十種ヶ峰山頂→14：05下山開始→17：00体育館到着

目標の7：00より15分も早いスタートだった。毎日「起きられない」とか「帰る」とかそんな言葉が日常だった8人の大きな進歩である。始めの急登もぐんぐんと進む。途中、エネルギー切れで進めなくなった仲間の荷物は、皆でカバーする。そして、元気になったら自分で持つ。なんともたくましい姿である。「8人で、山頂に立ちたい」ただその一心で前進した子どもたちにも、雄大なパノラマが待っていた。山頂に着くと記念写真を撮ることが多いのだが、このころの子どもたちはザックを下ろさない。初めころはすぐにザックを下して休憩しようとしていたのに……。不思議な光景である。初日、スタート地点に戻ったあの子どもたちの姿からは想像もできないほど誇らしく、かっこいい表情がそこにあった。見違えるほどにたくましく成長したグループに、スタッフ一同、感動の嵐だった。



下山に入っても、特に大きなストップもなく、途中の方丈原でティータイムをするほどの余裕をみせた男子8人。実は、スタッフ3人もみんな男性ということで、男衆11人にしか共有できない、宝物を手に入れたのではないかと思っている。十種ヶ峰へ、お帰りなさい。本当に、よくがんばりました。

3班：5：00起床→7：15出発→12：40十種ヶ峰林道合流→13：50下山開始→15：30神角神社前通過→17：00車にピックアップ→17：30体育館到着

今日は、5人でのスタートである。2人は、体調不良と足の指の怪我のため、本部判断で待機が決定している。子どもたちは、それでも2人の分の荷物も持ってスタートする。2人の個人装備はないが、テント、タープ、水、食料など、5人にかかってくる負担は大きい。一人当たり5～7キロぐらいの重さが加算されたこととなる。予定通りの出発であったが、歩みは進まない。深谷山の稜線に着いたときには、ほぼピークアタックは絶望に近い時間帯であった。しかも今日は、17：00体育館という絶対的な制約がある。本部もインストラクターもつらい宣告をしなくてはいけなくなった。しかし、子どもたちは前向きである。エスケープルートを通して神角神社へと降りる。そして、道路を通して体育館を目指す。神角神社通過が15：30。17：00体育館を考えると、車によるピックアップが濃厚となった。本部スタッフは、ただひたすら子どもたちの気持ちの落ち込みを気にしていたのだが……。さすが3班の女子のメンタルは強かった。自分たちが山頂ア

タックをできなかったことを悲観的に考えず、自分たちしか歩いていない道を歩いたこと、5人で7人分の荷物をもっていること、どんなときも明るく歩くこと、自分たちの歩み方にスポットを当てて、自分たちの挑戦を楽しんでいたのである。後に聞けば、深谷山稜線に登る急登で、涙が出て、こけまわって、の状態だったらしい。その状態から、よく立ち直ったと思う。これも5人でありながらつねに7人を意識していた3班だからであろう。車に乗せられて体育館に到着したときの表情は、大変明るく自信に満ちていた。どの班よりも重く、どの班よりも長く歩いていたのに、この晴れ晴れとした表情はどういうことだろう。迎えた私が、彼女たちの姿に泣かされてしまった。



## 8日目 「装備のクリーンアップ・ラストナイトミーティング」

期 日：平成30年8月24日（金）天気（小雨のち晴）

テーマ：決意の日（達成感と自信）

	1班	2班	3班
活動内容	装備のクリーンアップ・ラストナイトミーティング		
場 所	十種ヶ峰青少年自然の家体育館～十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場		

### 【活動の様子】

8日目の朝を迎えた。この日は台風の影響もあってか小雨のスタートとなった。装備のクリーンアップでは、汚れを取ることであわせて、しっかりと乾燥させることが大切になる。来年、これらの装備を使って9日間のチャレンジを行う仲間たちのためにも、心をこめてのクリーンアップが始まる。今日まで自分たちのチャレンジを支えてくれた装備に「ありがとう」の気持ちをこめて丁寧に汚れを落とし、干して乾かす。こうして年々これらの装備は受け継がれてきたのである。

昼過ぎには、8日ぶりとなる入浴が待っていた。どの子もお風呂から上がると表情も顔の色も明るくなる。8日間の汗を温かいお湯で洗い流し、身体も心もさっぱりしたようである。入浴後は、残りのクリーンアップを行ったり、8日間を振り返っての感想を書いたり、ゆったりとした時間をすごしていた。そして、このキャンプのラストナイトディナーは、ウナギ付チラシ寿司である。各班思い思いの盛り付けをして、最後の夕食を楽しんでいた。

夕食後は、ラストナイトミーティングである。満点の星空の下、キャンプで生活を共にした仲間と最後の夜を過ごす。このキャンプでどんなことを感じたのか、考えたのかを振り返る時間となる。初日から今日までの軌跡をたどり、自分の目標の達成度や、グループ

と自分自身の成長を確認し、仲間や自分自身のこれからについてしっかりと語り合う。また、8日間を振り返って、一人ひとりが一人ひとりに「ありがとう」のメッセージを伝えていく。辛いこと、楽しいこと、苦しいことがたくさんあり、心が動いた日々であった。そして、それらの感情を共にすごしてきた仲間である。ラストナイトミーティングはどの班も笑いあり、涙ありの最高の時間となった。

## 9日目「個人ラン・装備のクリーンアップ・懇談会・閉会式」

期 日：平成30年8月25日（土）天気（小雨のち曇）

テーマ：新たなる旅立ちの日（自律と奉仕）

	1班	2班	3班
活動内容	装備のクリーンアップ・個人ラン・懇談会・閉会式		
場 所	十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場		

### 【活動の様子 9日目】

朝はすっきりしない天気であった。しかし、子どもたちの最後のチャレンジである個人ランを応援するかのように、次第に天気は劇的に回復する。プログラムを振り返ると、基本的に晴れ。雨に降られることもあったが、活動を後押しする雨、子どもたちを励ます雨、すべては子どもたちのためになる天候に恵まれていたように思う。途中やってきた台風も、自然の偉大さには人間の力は小さなもの、と思わせるものであり、自然あつての私たちであるということに改めて感じる事ができた。最終日の天気は、別れの涙雨から子どもたちの新たなる旅立ちを祝福するものへと変わった。

最終日は、コンクルーディングフェーズと呼ばれ、身体的・精神的な挑戦のクライマックスとしての個人ランを行う。キャンプ終了後もキャンプの効果が持続するように、個人で体験の内面化を図る目的で行う。クリーンアップは8日目にほぼ済ませており、今日はバンダナに互いのメッセージを書き込んだり、仲間との時間を楽しんだり、班での残り少ない時間を味わっていた。

8時半ごろから保護者とインストラクターの保護者面談も始まった。インストラクターは9日間の子どもの様子を具体的な出来事をもとに丁寧に保護者に伝えていく。子どもたちの成長を前向きに捉え保護者へ伝える。日常に戻った子どもたちを見守る保護者が、9日間の子どものチャレンジした姿を知っている、ということは大きな意味をもつであろう。

さあ、新たな旅立ちとなる個人ランである。個人ランでは、速さや順位を争うものではない。これまではグループを拠点に活動してきたが、最後は自分を信じて走るのである。自分の決めた目標を思い浮かべながら走る。アップダウンの激しいクロスカントリーコー

ス。これからの人生においても、自分で目標を設定し、踏ん張らなくてはいけない瞬間がきっと訪れる。そのときに思い出してほしい。がんばりぬくことのできる自分を。困難に見えることにも挑戦して欲しい。きっと何とかなると自分を信じて。個人ランにはそんな願いがこめられている。一緒に走っている仲間から直接の励ましの声を受けることはできないが、仲間も挑戦している。これまで共にすごした仲間の存在を感じながら走ることは、自分の力になる。仲間を励ます力になる。ひとりでも十分がんばれる自分を感じてほしいと思う。

10時半、スタートの時である。ディレクターとあいこじゃんけんを行い、あいこになった子どもからスタートする。30分~1時間後、すべての子どもがゴールをした。ゴールゲートをくぐる時の子どもたちの表情は、みな晴れ晴れとしている。仲間を迎える表情は誇らしく、清しい。やり遂げたという達成感に包まれ、仲間を信じること、がんばることのすばらしさを知る子どもたちの姿がそこにあった。



続いては、最後の行事、閉会式である。閉会式では、みんなで作る。「9日間で見つけたこと、気づいたこと。そして、これからにつなげていきたいこと」をテーマに一人ずつ話した。子どもたちはそれぞれ自分の言葉でこの9日間を振り返った。一人ひとりが言葉をかみ締めるように自分の思いを話すのだが、どの子も大きな声！自便に満ち溢れていた。

1班は、本音、本当の自分について。自分が自分であってもよいこと、このキャンプの仲間だけでなく、日常生活（学校）でも自分らしくありたいことを願う気持ちが伝わってきた。自分をありのまま受け入れることは、簡単なようで難しい。自分の中にあるちょっといやな自分の感情ともまっすぐ向き合い、受け入れていく。この9日間を本音でぶつかり合った経験をもつこの7人なら、きっと大丈夫。信じている。

2班は、言葉の難しさと言葉の持つ力について。この班は、ずっと「8人」ということにこだわってきた。だからこそ、8人でこのキャンプを成し遂げるために多くの言葉を使ったのだろう。そしてその言葉を実現させることの難しさも味わったのだろう。相手への言葉は自分への励ましの言葉でもあったことだと思う。「もうちょっとがんばってみようと思う」「日ごろ、自分は友だちにどうかかわっているか振り返ってみようと思った。」など、心からあふれる素直な言葉に、心動かされた。

3班は、結果より過程が大切であること。この7人は、途中何度も仲間が倒れた。そのたびに、どうやって乗り越えようかと明るく元気に考えていた。その結果、8日目にまた7人が集った。どの子も「戻ってくる」と約束し、それを実現した。この班には、その力があった。すごいことだと思う。仲間も、戻ってきてくれると信じていた。だから、この班の7人にとって、共に歩んでいた日々が、苦しんだ時間、楽しかった瞬間があったからこそ、閉会式の7人集合につながっている、と心から思えたのだと思う。他の班とはちが

う景色の中で、最高のチャレンジをした7人に拍手を送りたい。

ディレクターからは、3班3様の歩みをしたみんなに「不可能の可能性」について伝えた。3班それぞれの歩みは、私にとってどれも想定外のものに近かった。「ありえない」ということはありえない、そう思った。そして、「何とかなる」。もちろん、多くの準備とたくさんの人たちの支えがあったからこそである。これから子どもたちは多くの壁にぶつかることと思う。迷うこと、立ち止まることがあると思う。でも、恐れることなかれ、何を信じるか、どのように立ち向かうか、自分を信じられるか。十種ヶ峰青少年自然の家所長さんの言葉をお借りして「君たちには、自分で自分を決定する力がある！！」

すべての子どもたちとスタッフに感謝をしたい。すばらしい夏をありがとう。そして、みんながこれから最高のチャレンジをすることを信じている。本当に、ありがとう。

#### 【参加者の感想より】

- ・ただ楽しく話すのが仲間ではなく本音でぶつかり合えるのが仲間だということに気づけた。
- ・仲間とはお互いの足りない部分を補いながら協力しあう集団だと思った。
- ・学校生活でも他の人への気遣いを忘れず楽しく過ごしたい。自分のやるべきことをなるべく早く終わらせて友だちを手伝ってあげるなど、気をきかせて動きたい。
- ・日常生活に生かしてがんばりたいことは、自分に自信をもって、自分のことを大好きにすることです。
- ・私は誰かに遠慮していて自分の本音を伝えることはまれだった。だからこれからはいいことも悪いことも思ったら口に出していきたい。
- ・自分が成長したと思う事は、あと少しだけがんばろうと思えるようになったことです。
- ・自分が家で家族にどれほど迷惑をかけていたかが分かった。もう迷惑をかけないようにしたい。
- ・最初は単独行動がしたいと思っていたけど集団行動の大切さを知ることができました。
- ・困っている仲間や友だちを絶対に見捨てないようにしたいと思いました。

